

採卵鶏の経済検定試験 平成14年度鶏の諸性能と経済性

岸井誠男・引地宏二

Comparison of Performance in Various Layers
Egg Production and Profits of Layers in 2002 Term

Yoshio KISHII and Kouji HIKICHI

本県の採卵鶏種選定の一助とするためジュリア、デカルブ・ホワイト(D ホワイト)、マリア、ニーナ、コーラル、デカルブ・ブラウン(ブラウン)の6銘柄の検定を実施した。育成率はD ホワイトが100%と良好な成績を示した(P<0.05)。20週齢体重はブラウン及びコーラルが重かった(P<0.05)。0~20週齢の飼料摂取量はコーラルが有意に(P<0.05)多かった。産卵率はジュリアが高く、マリアが低かった(P<0.05)。平均卵重はコーラルが重く、マリアが軽く、銘柄間差は約7gあった(P<0.05)。日産卵量はコーラルが最も良く、次いで、ジュリアが良好であった(P<0.05)。飼料摂取量はマリアが有意(P<0.01)に少なく、銘柄間の差は6gであった。飼料要求率はコーラルが1.97と良好な成績を示した(P<0.05)。卵質のハウユニットはブラウンが有意(P<0.05)に低かった。卵殻強度はマリアが低かった(P<0.05)。非規格卵収益はコーラル>ジュリア>ブラウン>の順となり、規格卵収益ではジュリア>コーラル>ブラウン>の順となった(P<0.05)。

キーワード：採卵鶏、経済検定、銘柄、卵質、鶏種

養鶏農家の経営安定を図るには、少しでも鶏卵生産に係るコストの低減を図ることが重要である。しかし、各養鶏農家の生産販売形態は様でなく、それぞれ特徴があるので、各経営体に合った優秀な銘柄を選ぶことが農家にとって必須である。このため、各養鶏経営に合った銘柄を選択する一助とするため、銘柄比較試験を実施している¹⁾。

しかし、各メーカーとも意欲的に育種改良に取り組む、年々改良が進められており、各銘柄の産卵性能、卵質の特徴も年により異なっている。

そこで、多数流通している銘柄及び今後流通が期待される銘柄について、それらの特質と能力を検定し、養鶏農家の鶏種選定時の参考になるように今回は白玉鶏4銘柄、ピンク玉鶏1銘柄、赤玉鶏1銘柄で本試験を実施した。

材料及び方法

供試鶏はジュリア、デカルブ・ホワイト(D ホワイト)、ハイライン・マリア(マリア)、ニー

ナの白玉鶏とコーラルのピンク玉鶏及びデカルブ・ブラウン(ブラウン)の赤玉鶏の6銘柄とし、それぞれ100羽を用いた。

試験期間は平成14年3月から平成15年9月までの80週間とした。

飼育方法は0~3週齢は立体育雛器で1群100羽とし、4~17週齢はウインドウレス2段群飼ケージを用い、1群25羽を4ケージに割り振り1試験区とした。18~79週齢は開放鶏舎ケージの2羽飼いと、1試験区に12ケージを割り当てた。

給与飼料は市販飼料で、1週齢は育成え付け用(CP22.0%-ME3.15kcal/g)、1~3週齢は育成前期用(CP21.0%-ME2.95kcal/g)、4~9週齢は育成中期用(CP18.0%-ME2.80kcal/g)、10~17週齢は育成後期用(CP14.0%-ME2.70kcal/g)、18~80週齢は成鶏用(CP17.0%-ME2.80kcal/g)を用いた(表1)。

調査項目は育成期が育成率、体重(4、10、20週齢時)及び飼料摂取量で、成鶏期は50%産卵到達

日齢、産卵率、日産卵量、飼料摂取量、飼料要求率、生存率、卵重、卵重規格分布、卵質〔36週齢から6週間隔でハウユニット、卵殻強度、卵殻厚、卵比重、血斑・肉斑混入率を、42週齢から12週間隔で卵殻色を43週齢に卵黄色及び卵各部の重量と比率を調査〕とした。

収益の算出計算は、粗収益＝鶏卵収入－粗生産費（ヒナ代＋育成飼料費＋成鶏飼料費）とした。ヒナ代は160円とし、飼料価格は育成え付け用を61.69円/kg、育成前期用を56.47円/kg、育成中期用を43.52円/kg、育成後期用を34.61円/kg、成鶏用を39.33円/kgとした。また、卵価は平成14年7

月～15年9月の季節変動卵価とし、非規格卵価の推移を図1に、規格卵価の推移を図2に示した。期間の平均価格は、非規格卵価（東京、事業協組）が144.8円/kgとなり、規格卵価（東京、全農）がクラス別にLL級149.3円/kg、L級159.2円/kg、M級161.7円/kg、MS級157.5円/kg、S級152.5円/kg、SS級88.9円/kgとなり、規格外卵はLL級またはSS級から50円安とした。

データの解析は1元配置で分散分析を行い、銘柄間の差はDuncanの多重範囲法を用いて検定を行った。また、育成率及び生存率は角変換を行って分散分析に供した。

表1 飼養方法及び給与飼料

週 齢	飼 養 方 法	給 与 飼 料
0	立体育雛器	え付け用 CP22%-ME3.15kcal/g
1～3	〃	育成前期用 CP21%-ME2.95kcal/g
4～9	ウイントウレス2段群飼ケージ	育成中期用 CP18%-ME2.80kcal/g
10～19	〃	育成後期用 CP14%-ME2.70kcal/g
20～80	開放成鶏舎2羽飼い	成 鶏 用 CP17%-ME2.80Kcal/g

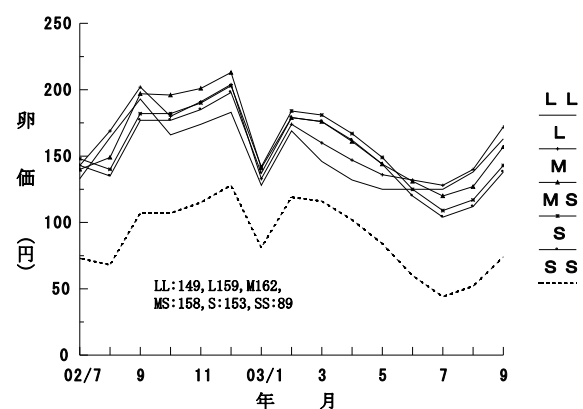
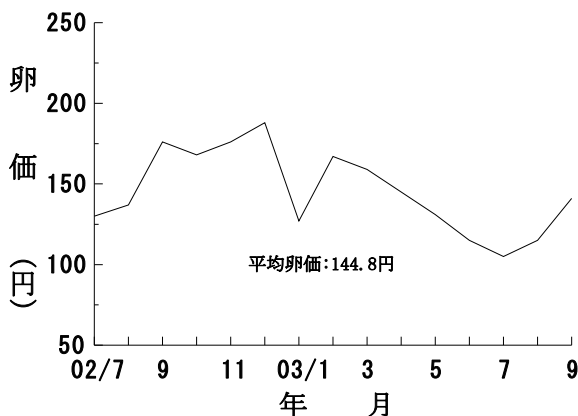


図1 非規格卵価の月別推移(H14.7～H15.9)

結果及び考察

1. 育 成 期

育成期の成績を表2に示した。育成率はDホワイトが100%と良好であったが、ブラウンは90%を切る成績となった(P<0.05)。

4週齢体重は白玉鶏のニーナがやや重くなった。10週齢体重は赤玉鶏のブラウン、ピンク玉鶏のコーラルが有意に(P<0.05)重く、逆に、マリアが軽かった。この傾向は20週齢体重でも同じで、ブラウン及びコーラルが有意に(P<0.05)重くなった。

0～3週齢のえ付け期及び育成前期の飼料摂取では銘柄間の差は小さかったが、マリアが少ない

図2 規格卵価の月別推移(H14.7～H15.9)

摂取量であった。4～9週齢の育成中期の飼料摂取量はピンク玉鶏のコーラルが有意(P<0.05)に多い飼料摂取量となり、次いで、ジュリア、Dホワイトが有意に(P<0.05)多くなった。10～19週齢の育成後期の飼料摂取量もコーラルが多い摂取量となり、次いで、ブラウンで、逆に、ジュリアが少ない摂取量となった(P<0.05)。0～19週齢の飼料摂取量はコーラルが有意に(P<0.05)多くなり、ニーナ、マリアが少なかった。

このように、マリアが他の銘柄に比べて20週齢の体重が軽く、飼料摂取量が少ない傾向は他府県の報告^{2) 3) 4) 5)}とも一致している。

表2 育成期の成績 (0~19週齢)

項 目	鶏 種	育成期の成績 (0~19週齢)					
		ジュリア	ニーナ	マリア	デカルブ ホワイト (Dホイト)	デカルブ ブラウン (ブラウン)	コーラル
育成率	%	94.2 ^a	98.1 ^c	99.0 ^c	100.0 ^d	89.5 ^b	96.6 ^c
4週齢体重	g	292	264	307	343	348	292
10週齢体重	g	960 ^a	860 ^{a b}	837 ^a	903 ^b	1063 ^d	1055 ^d
20週齢体重	g	1420 ^a	1451 ^a	1375 ^a	1484 ^a	1747 ^b	1756 ^b
飼料摂取量	g						
0~20週齢		7808 ^b	7331 ^a	7358 ^a	7824 ^b	7868 ^b	8585 ^c
(0~3週)		558	604	404	504	484	564
(4~9週)		2379 ^b	2203 ^a	2155 ^a	2326 ^b	2211 ^a	2828 ^c
(10~19週)		4870 ^{a b}	4724 ^a	4599 ^a	4934 ^{a b c}	5153 ^{b c}	5274 ^c

※ 異符号間には有意差あり、大文字(P<0.01)、小文字(P<0.05)

2. 成鶏期

(1) 生産性の成績

表に成鶏期の産卵成績を図3及び4に20~80週齢の産卵率と平均卵重の推移を4週齢間隔で示した。50%産卵到達日齢は色玉鶏のコーラル、ブラウンが130日台で有意に(P<0.01)早く、白玉鶏は140日台となり、銘柄間の差は8日程度あった。しかし、白玉鶏の銘柄間では2.5日とわずかの差であった。

産卵率は初産日齢の早いブラウンとコーラルの立ち上がりが早かったが、コーラルはその後の伸びがブラウンより悪く、産卵後期での持続性も低かった。しかし、ブラウンはピーク後の低下が少なく、他の銘柄より高い産卵率で推移した。ジュリアは中程度でスタートしたが、ピーク以降の下降率が少なく、産卵後期での持続性も良かった。マリアは立ち上がりが遅く、ピークもやや低くピーク後の推移も他の銘柄より低位で推移した。その結果、20~80週齢の平均産卵率はジュリアが高く、マリアは他の銘柄より有意(P<0.05)に4~7%低い産卵を示した。

このジュリアの産卵率が高く、マリアの産卵率が低いのは他県の報告^{4) 5)}でも見られるが、他銘柄とのこれ程の大きな差ではなく、報告^{4) 5)}によっては中位の値を示しているものもある。また、Dホワイトは本県の産卵成績は中位の値であるが、最も良好な示している報告⁶⁾もあり、ロットによる成績の差が感じられる。

卵重の推移は銘柄により差があり、産卵初期の4週間の平均卵重で7gの違いがあった。その後の推移はスタート時の差を継続しており、コーラルは常に重い卵重で、マリアは常に軽い卵重推移を

示した。この結果、平均卵重はコーラルが66gと重くなり、マリアが軽く、銘柄差は約7gであった(P<0.05)。このマリア卵重傾向は他府県の報告^{2) 3) 4) 5)}と同様に銘柄の明確な特徴と考えられる。

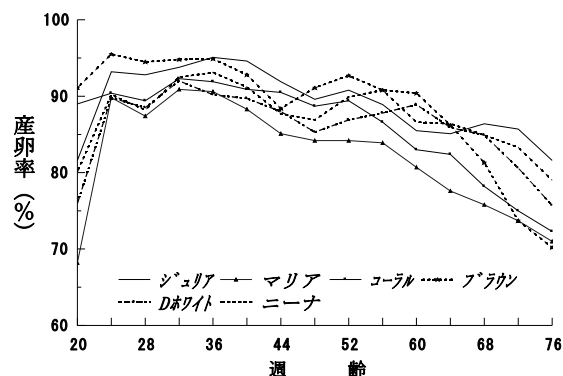


図3 産卵率の推移

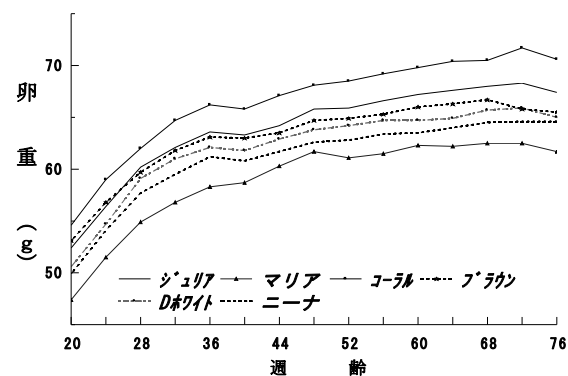


図4 卵重の推移

表3 成鶏期の産卵成績 (20~80週齢)

項 目	鶏 種	デカルブ			デカルブ		
		ジュリア	ニーナ	マリア	ホワイト (Dホワイト)	ブラウン (ブラウン)	コーラル
50%産卵到達日齢	日	143.0 ^B	143.8 ^B	145.3 ^B	142.8 ^B	136.5 ^A	138.3 ^A
産卵率	%	89.1 ^c	87.4 ^{b,c}	82.5 ^a	86.0 ^b	88.5 ^{b,c}	88.2 ^{b,c}
平均卵重	g	63.9 ^D	61.0 ^B	58.9 ^A	62.1 ^{B,C}	63.1 ^{C,D}	66.4 ^{E,c}
日産卵量	g/日	57.0 ^{c,d}	53.3 ^b	48.8 ^a	53.4 ^b	55.7 ^c	58.5 ^{d,d}
飼料摂取量	g/日	113.9 ^B	113.4 ^B	109.3 ^A	114.0 ^B	115.0 ^B	115.3 ^B
飼料要求率	%	2.00 ^{a,b}	2.13 ^c	2.23 ^d	2.14 ^c	2.07 ^b	1.97 ^{a,a,b}
生存率	%	85.7	77.3	90.6	87.1	88.4	94.7
43週齢体重	g	1756 ^b	1713 ^b	1547 ^a	1778 ^b	2051 ^c	1998 ^c

※ 異符号間には有意差あり、大文字 (P<0.01)、小文字 (P<0.05)

また、コーラルはマニュアルでは63gが標準で今回の成績ほどの重い卵重とはなっておらず、飼料給与の工夫による卵重コントロールが必要と考えられる。

日産卵量は卵重の重かったコーラルと産卵率が高かったジュリアが良好であった (P<0.05)。

マリアの日産卵量が低い値となっているが、他府県の成績^{2) 3) 4) 5)}も本県と変わらない値を示しており、一定の成分の飼料を初産から80週齢まで給与する方法では、これがこの銘柄の能力と考えられる。

飼料摂取量はマリアが有意 (P<0.05) に少なく、他の銘柄は類似の値で、摂取量の多いブラウンとの差は6gであった。しかしながら、他県の成績^{4) 5)}では90g台の飼料摂取量と非常に少ない値を示しており、飼料摂取量の少ない銘柄と推察される。

飼料要求率はコーラルが1.97と良好で、次いで、ジュリアも2.00と良い成績を示した (P<0.05)。

このジュリアの飼料要求率が良好な傾向は多くの県の報告^{4) 5)}と一致しており、安定した成績と考えられる。

生存率はコーラルとマリアが90%台と高かったが、有意な差ではなかった。有意な差ではないが、Dホワイトが他県⁶⁾では強健性が強調されているが、本県では中程度の成績となった。

43週齢体重は20週齢体重と類似の傾向を示し、色玉鶏が有意に (P<0.05) 重くなった。マリアは6銘柄の中で最も軽く、有意な差 (P<0.05) であった。

(2) 卵質の成績

卵質は34週齢以降8回の調査の平均値を表4に、ハウユニットと卵殻強度及び卵殻厚の推移を図5~7に示した。ハウユニットは週齢が進むにつれて低下する傾向を示したが、ブラウンは産卵前期

から他の銘柄より低い値を示し、以降常に下位で推移し、72週齢には60近くまで低下した。マリアは常に他の銘柄より高位で推移した^{3) 4) 5) 7)}。この結果、ブラウンは80を切り、有意に (P<0.05) 低い値となった。Dホワイトは中程度の成績を示したが、他県では良好な成績⁶⁾を示しており、ロット間のバラツキが見られ、成績の安定性に欠ける。

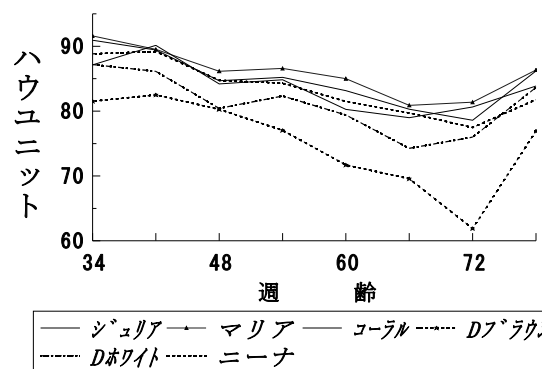


図5 34~78週齢のハウユニットの推移

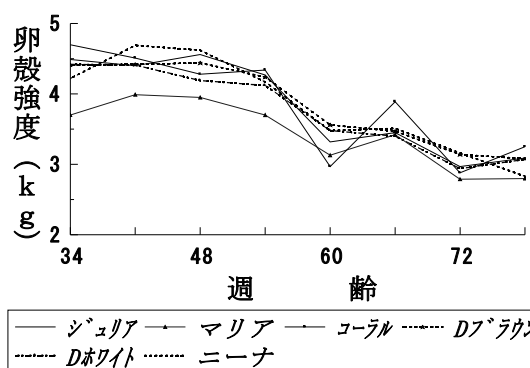


図6 34~78週齢の卵殻強度の推移

卵殻強度も週齢の経過につれて弱くなるが、マリアは産卵前中期にかけて常に低位で推移したが、

産卵後期では他の銘柄と類似の推移となった。この結果、8回の平均ではマリアが有意に(P<0.05)低い値となったが、他の銘柄間には差がなかった。

このマリアの傾向は他県の成績^{3) 4) 5) 7)}と同様であった。

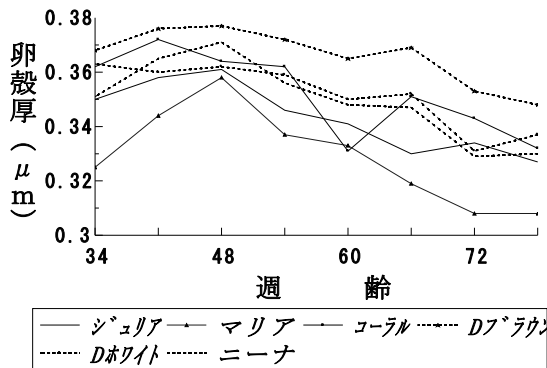


図7 34~78週齢の卵殻厚の推移

卵殻厚も産卵中期以降週齢の経過に伴う低下は

みられたが、ブラウンは常に他の銘柄より厚く推移を示し、産卵後期での低下も少なかった。逆に、マリアは他の銘柄より常に薄い状態で推移した。この結果、8回の平均ではブラウンが有意に(P<0.05)厚い値となり、逆に、マリアが薄く、この銘柄は卵殻強度も有意に低い値を示した。比重、卵殻重、卵殻比率は卵殻厚と相関が高く、卵殻厚の厚い銘柄はこれらの項目も良好な値を示し、マリアはこれらの項目が有意に(P<0.05)低い値を示した。

肉斑は赤玉鶏のブラウンが高く、30%強の値となった。また、ピンク玉鶏のソニアも約17%と高率の出現率となった。他県の成績⁶⁾では銘柄は異なるが60%程度の肉斑出現率報告⁷⁾もあり、今回用いたブラウンは出現率の少ない銘柄と言える。

表5は42週齢に卵質検査で実施した鶏卵各部位の構成を示した。卵形指数はジュリア、Dホワイトの値が有意に(P<0.05)小さく、丸い球形に近い形を示した。

表4 卵質の成績 (34~78週齢)

項目	鶏種			デカルブ	デカルブ	コーラル
	ジュリア	ニーナ	マリア	ホワイト (Dホワイト)	ブラウン (ブラウン)	
ハウユニット	84.81 ^{c d}	83.44 ^{b c}	85.93 ^d	81.17 ^b	75.20 ^a	83.89 ^c
卵殻強度 kg	3.85 ^b	3.84 ^b	3.43 ^a	3.75 ^b	3.84 ^b	3.85 ^b
卵殻厚 mm	0.343 ^b	0.350 ^{b c}	0.329 ^a	0.352 ^c	0.366 ^d	0.352 ^c
卵殻比重	1.0812 ^a	1.0839 ^{b c}	1.0807 ^a	1.0846 ^{b c}	1.0863 ^c	1.0827 ^{a b}
卵殻重 g	5.97 ^b	5.92 ^b	5.39 ^a	6.02 ^b	6.18 ^c	6.23 ^c
卵殻比率 %	9.01 ^b	9.15 ^c	8.79 ^a	9.30 ^c	9.57 ^d	9.07 ^b
血斑 %	3.13	2.50	0.63	3.13	1.88	3.75
肉斑 %	0.00 ^A	0.63 ^A	0.00 ^A	1.85 ^A	33.25 ^C	17.50 ^B

※ 32週齢以降8回の成績の平均、異符号間には有意差あり、大文字(P<0.01)、小文字(P<0.05)

表5 鶏卵各部位の構成 (42週齢)

銘柄	卵形指数	卵重	卵殻重	卵黄重	卵白重	卵殻比	卵黄比	卵白比
ジュリア	74.81 ^a	65.05 ^b	6.06 ^{b c}	17.19 ^c	41.67 ^{b c}	9.76	26.44 ^{b c}	64.03 ^{a b}
ニーナ	76.64 ^b	60.48 ^a	5.75 ^b	15.96 ^{a b}	38.54 ^a	9.35	26.37 ^{c c}	63.72 ^{a b}
マリア	76.13 ^{a b}	59.40 ^a	6.25 ^a	15.62 ^a	38.44 ^a	9.81	26.24 ^{b c}	64.42 ^b
Dホワイト	74.94 ^a	61.80 ^a	6.02 ^b	16.69 ^{b c}	39.10 ^a	9.49	27.10 ^c	63.21 ^a
ブラウン	76.86 ^b	62.05 ^a	5.62 ^{b c}	15.77 ^{a b}	39.80 ^c	9.21	25.60 ^b	64.42 ^b
コーラル	76.64 ^b	66.50 ^b	5.66 ^c	16.27 ^{a b c}	43.83 ^{a b}	9.23	24.52 ^a	65.84 ^c

※ 異符号間には有意差あり(P<0.05)

卵殻重及び卵殻比は34~78週齢の8回の測定の平均値と異なり、マリアの卵殻重が有意に(P<0.05)重く、卵殻比は他の銘柄よりやゝ高くなった。

調査を実施した42週齢は産卵中期で卵質の低下も少ない日齢のため8回の傾向と異なると考えられる。卵黄重はジュリアが有意(P<0.05)に重く、

マリアが有意(P<0.05)に軽くなった。しかし、
表 6

ジュリアは卵重が他の銘柄に比べて2.5g 強重く、
卵 殻 色

銘 柄	L* 値	a* 値	b* 値	△e 値
14年え付けブラウン	60.77±4.89	16.46±2.32	26.90±2.79	41.95±5.08
〃 コーラル	79.90±3.07	5.96±1.98	18.29±3.15	20.17±4.53
13年え付けボリス	62.31±3.55	15.96±2.00	27.28±2.47	41.24±4.08
〃 ソニア	79.07±3.27	6.99±2.06	19.52±3.16	23.07±4.71

※ 34、42、54、66及び78週齢の平均

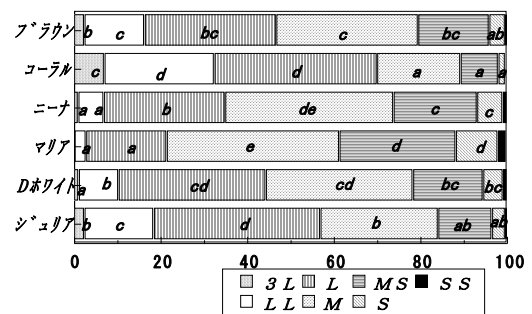
マリアは2.5g 強軽くなっている。この結果、卵黄比はD ホワイトが有意(P<0.05)に高く、卵重の重いコーラルが有意に(P<0.05)低くなった。卵白重はコーラルが重く、マリアが軽くなった(P<0.05)。卵白比は卵白重の重かったコーラルが有意に(P<0.05)高い値となり、D ホワイトが有意に(P<0.05)低い値となった。

表 6 には色差計で測定した赤玉鶏とピンク玉鶏の卵殻色の結果をL*値、a*値、b*値、△e値で示した。14年え付けのボリスと比較すると、13年え付けのブラウンはL*値が低く、a*値がやゝ高く、b*値がやゝ低く、△e値がやゝ大きいためブラウンはボリスより赤色がやゝ強い卵殻色といえる。標準偏差は各項目ともブラウンがボリスより大きいため卵殻色のバラツキはボリスの方が少ないといえる。また、ピンク玉鶏のコーラルはソニアに比べてL*値が大きく、a*値、b*値ともやゝ小さく、△e値が小さいため、コーラルはソニアより色つきが薄いことが分かる。コーラルの各値の標準偏差はソニアよりやゝ小さくバラツキは少ないと考えられる。

(3) 規格卵比率の分布

図 8 に規格卵の分布を帯グラフで、図 9 にはL、M、MS級のパックに詰めて販売されるパック卵比率を4週毎の推移で示した。

規格卵比率の特徴は、平均卵重と連動して卵重の重かったコーラルが3L級やLL級の比率が有意に(P<0.05)高く、3L級は次に卵重の重いジュリアやブラウンの3倍の比率を示した(P<0.05)。逆に、MS級、S級が低い比率を示し、S級は1%台と少ない量となった(P<0.05)。卵重の軽かったマリアはS級、SS級が多く、S級は10%近くの高い比率を示した(p<0.05)。スーパーでパック詰めで販売されるL~MSのパック卵比率はマリア、ニーナ、D ホワイトが有意に(P<0.05)高い比率となった。これらの成績は他府県^{2) 3) 4) 5)}と同様の成績であった。



※異符号間に有意差あり(P<0.05)

図 8 規格卵比率

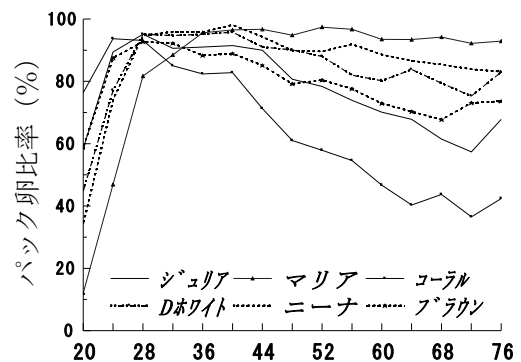


図 9 パック卵(L級~MS級)比率の推移

(4) 経済性能

表 7 に非規格及び規格卵価で計算した収益性を示した。収益性は生産卵量×卵価－(ヒナ代+育成飼料費+成鶏飼料摂取量×飼料価格)とし、卵価は全農新聞相場の規格卵価及び事業協組の非規格卵価の週平均卵価を用いて計算をした結果、非規格卵収益ではコーラル>ジュリア>ブラウン>ニーナ>D ホワイト>マリアの順となり、規格卵収益ではジュリア>コーラル>ブラウン>ニーナ>D ホワイト>マリアの順となった(P<0.05)。このように用いる卵価の違いによって収益性の順位が異なってくるのは、鶏の特徴を良く反映しているといえる。コーラルとジュリアの順位が異なる

ってくるのは銘柄によって規格卵比率の違いによるもので、パック卵比率が13%異なっていることを反映したと推察される。

マリアは本県の成績では収益性が悪かったが、他県^{4) 5)}では良好な成績を示している。産卵量は本県と同様の値であるが、飼料摂取量が少ないため飼料要求率が良好で収益性が他銘柄より勝ったと考えられる。これらのことから、マリアに成績を期待するには飼料の栄養価や給与方法等を考える必要がある。

表7 経済性能の成績 (20~80週齢)

銘 柄	非規格卵卵価 円/羽・年	規格卵卵価 円/羽・年
ジュリア	978 ^d	1219 ^c
ニーナ	810 ^{b,c}	1071 ^b
マリア	642 ^a	880 ^a
D ホワイト	791 ^b	1009 ^b
ブラウン	914 ^d	1145 ^{b,c}
コーラル	1024 ^c	1167 ^{b,c}

※ 異符号間に有意差あり (P<0.05)

総 括

ジュリア：やゝ育成率が低く、生存率もやゝ低かった。産卵率は最も良く、平均卵重はやゝ重い傾向で、日産卵量は良好であった。飼料摂取量は中庸で、飼料要求率は良好であった。パック卵比率は20~80週齢の平均で80%を切ったが、生産性が高いため、収益性は規格卵価で最も良く、非規格卵価でも2番手であった。卵質ではハウユニットは良好で、卵殻強度も良好であった。

ニーナ：育成率は良好であったが、生存率は7%とやゝ低かった。産卵率は良好で、平均卵重はやゝ軽かったが、日産卵量は中庸であった。飼料摂取量は中庸で、飼料要求率も中庸であった。卵質ではハウユニットが良好で、卵殻強度も強く、卵殻厚も厚かった。規格卵はL級、M級、MS級が多くパック卵比率は最も高かった。

マリア：育成率は良く、生存率も良好であった。産卵率は他の銘柄より4~6%低かったが、80%以上の成績であった。卵重は軽く20~80週齢の平均で60g弱であった。日産卵量は50gを切り、飼料要求率も低かった。パック卵比率(L~MS)は良好であったが、生産量が低いため、収益は6位であった。卵質のハウユニットは最も良かったが、卵殻強度は低く、卵殻厚も薄かった。

デカルブ・ホワイト：育成率は100%と良かったが、生存率は中庸であった。産卵率は中庸で、平均卵重も中庸で、日産卵量も中庸であった。飼

料摂取量も中庸で、飼料要求率も中庸であった。パック卵比率は高かったが、収益性は非規格卵価、規格卵価とも5番手となった。卵質のハウユニットはやゝ低く、卵殻強度は良好であった。

デカルブ・ブラウンは育成率が90%を切る成績で6銘柄の中で最も低かった。しかし、生存率は良好であった。赤玉鶏で体重は重かったが、育成期飼料摂取量は白玉鶏と同等であった。産卵率は良好で、平均卵重はやゝ重く、日産卵量は良好であった。成鶏期の飼料摂取量はやゝ多かったが、飼料要求率は良好であった。パック卵比率は中程度で収益性は非規格卵価、規格卵価とも3番手となった。卵質はハウユニットが75と低かったが、卵殻強度、卵殻厚は良好であった。

コーラル：育成率は良好で、生存率も95%弱と6銘柄の中で最も良かった。色玉鶏で体重が重く、育成期の飼料摂取量も最も多かった。産卵率は良好で、平均卵重も他の銘柄に比べて重く、日産卵量は最も良好であった。飼料摂取量はやゝ多かったが、日産卵量が高いため、飼料要求率は最も良好で2を切る値であった。生産量が高かったため非規格卵価での収益性では最も良かったが、パック卵比率は最も低いため、規格卵比率での収益性は2番手となった。卵質のハウユニット、卵殻強度、卵殻厚は良好であった。

引用文献

- 1) 岸井誠男・折原惟子. 採卵鶏の経済検定試験. 神奈川畜試研報, 89: 29-35. 2002
- 2) 村上 司・西井真理・衣川貞志・八木 充. 採卵鶏の高能力管理技術. 京都畜研成績, 40: 77-92. 2000
- 3) 須田朋子・北爪浩三・後藤美津夫. 鶏の経済能力検定成績(第35回). 群馬畜試研報, 7: 81~92. 2000
- 4) 後藤美津夫・松原英二. 鶏の経済能力検定成績(第37回). 群馬畜試研報, 9: 37~45. 2002
- 5) 後藤美津夫. 鶏の経済能力検定成績(第38回). 群馬畜試研報, 10: 21~29. 2003
- 6) 山本哲也・西井真理・村上 司・八木 充. 採卵鶏の高能力管理技術. 京都畜研成績, 43: 66-86. 2003
- 7) 村上 司・西井真理・衣川貞志・八木 充. 銘柄別鶏卵品質調査. 京都畜研成績, 40: 93-101. 2001